

令和8年7月8日市長定例記者会見 会見録

◆司会

それではただいまから、静岡市長定例記者会見を開会いたします。
本日の発表案件は3件でございます。1件目が、模型活用 STEAM 教育プロジェクトの開始。2件目が、知・地域共創コンテスト U N I T E 2026 の提案募集。3件目が、しずおかほっとリンク生きづらさを抱える方のための居場所の開設となります。まず1件目、STEAM 教育プロジェクトでございますが、概要説明に当たりまして、難波市長、中村教育長、それと昨日協定を締結いたしました、慶應義塾大学環境情報学部教授で K G R I、FeED プロジェクト研究代表の神成淳司様にもご同席いただいております。それでは、難波市長よりお願いいたします。

◆市長

はい、よろしくお願いいたします。それでは模型活用 STEAM 教育プロジェクトの開始についてご説明をいたします。

この静岡市は模型の世界首都って言いますけども、地域資源である模型を活用した静岡発の新たな STEAM 教育モデルを構築するための模型活用 STEAM 教育プロジェクトというものを開始します。この STEAM 教育についてはもうご存知の方多いと思いますが、そこに少し書いておりますけども、STEAM の S は科学、そしてテクノロジーの技術、工学のエンジニアリング、芸術リベラルアーツのアーツ、それから数学のマスマティクスですね。これら全てを横断的に学んで課題解決力や想像力を育む教育ということで、世界的に今推進されているプロジェクトの教育方法ということになります。今年中にこの企業、学校、研究機関、静岡県、静岡市による産学官連携のコンソーシアムを設置してこのプロジェクトを実施します。コンソーシアムには、教育そして地場産業振興の共同研究に関する協定を東京の慶應義塾大学で結んだんですが、静岡市とこの協定を結んだ学校法人慶應義塾大学のグローバルリサーチインスティテュートの K G R I が参画します。このプロジェクトは、K G R I が教育と創造を通じて地域エコシステムを築くことを目的に推進する研究プロジェクト「フィード」としても位置づけられます。

最初にやることですが、今年は株式会社タミヤのミニ四駆、ここにミニ四駆がありますけども、このミニ四駆を活用した教材開発を進めます。静岡市立高等学校と静岡県立清水東高等学校をモデル校に選定して有志生徒による学習や部活動で試行を開始します。このミニ四駆の魅力ですが、実はこの右奥は私が組み立てたんですけど、こちらと明らかに滑らかさが全然違うわけです

けど、ミニ四駆を作るのはすごく楽しいです。相当苦勞して作りましたが、作ると本当に楽しい。本当に細かいところを動かしたり、いろんなことを考えて作りますけども、そのもの作りを体験して、これ走らせてまた楽しいわけですね。この楽しさと、今度はこちらをこう走らせてこれがなぜ速く走るのかとかそういったことをしっかりと考えて、それでもっと早く走り出せないかとそういうことを考えるのが大事になってきますけども、これに今の情報技術であるとか、あるいはその計測技術を入れて、それをその教育教材として使っていこうというものです。このミニ四駆とセンサー計測やデータ分析技術などを組み合わせることで、科学的なアプローチを通じて、何をすれば速く走らせることができるかについての創造性とか問題解決力を養う教材として活用できる大きな可能性を秘めています。

今後5年間をかけて、この教育プログラムの高度化、モデル校以外の市内外の学校への展開を図り、模型活用 STEAM 教育エコシステムを確立します。企業、学校、研究機関、静岡県、静岡市が連携して実施するプロジェクトによって、次代を担う人材の育成と地域産業の発展に繋げていきたいと思っております。もう少し背景と課題についてのご説明を私からし、教育プロジェクトの内容については神成教授そして中村教育長からお話をしてもらおうと思います。

先ほどの STEAM 教育ですけども、これは教育が単なる知識の習得ではなくて、社会で求められる課題解決力や想像力を養い次世代を担う人材を育成する役割というのが増してきています。日本でもこの新教育が進められていますが、まだまだ教育機関と産業界の連携が十分とれておりません。この教育で得た知識や技術を実際の課題解決に活用する実践的な学習の機会というのが不足をしています。このことが製造業のデジタル化の遅れや技術人材不足などといった問題に繋がっていると指摘をされています。もう既に社会全体で AI やデータ活用は進んでいますけども、これまで学校教育の中で模型も活用されてきましたけども、まだまだこの新しい時代において AI であるとかデータ活用という、私はよく知能革命の時代と言っていますけども、そういう時代にこの模型を新しく教材としていかに活用していくかということが課題になってきています。こうした中で、静岡市が持つ模型産業の集積と高いもの作りの技術という強みを生かして、模型を活用した静岡発の新たな STEAM 教育モデルを構築することによって、教育と産業を結びつけた人材育成の取り組みを進めることが必要だと考えています。あわせて、STEAM 教育用教材といった模型の新たな価値を見出しそして需要が創出することになります。それが模型産業の持続的な発展と静岡市の経済成長に繋げていくことが必要だと考えております。もう一言だけ付け加えますと、非常に小さな取り組みに見えますけどもこれから世界展開をしていける STEAM 教育モデルだということがありますので、まず今年は静岡市

立高校と清水東高校で小さく始めますけど、これが非常に大きく広がっていくプロジェクトだと考えております。

私からは以上で具体的な内容についてはですね、神城教授からお話をさせていただきます。

◆神成教授

慶応大学の神成でございます。よろしくお願いいたします。別紙に用意してございますが、別紙1の方が全体像ということで書いております。今市長からのご案内いただきましたけど、STEAM教育といったときに誰が対象なのかという我々はやはり全年齢だと思っていまして、教育ってのやっぱり一生あるものですからそういった意味ではここに書いてありますようにまだ4歳から8歳、未就学児の頃からもの作りの楽しさを勉強し、それが様々な興味に結びつき大学、社会に出ていく。こういった一貫した流れの中でSTEAM教育の教材というのは世界的に不足していると我々は思っております。有名なものは、あのレゴのマインドストーム教材があるんですが、これは世界的に使われていますが日本発の教材というのは世界的にはまだないという状況です。今回、第1弾としてミニ四駆を使うわけですがやはり非常に魅力的な素材、やっぱり子供たちが最初に手に取りたい、遊びたい、そして私が今回ミニ四駆に着目したのは、お互いが競争できる。レゴのマインドソウルが世界的に使われているんですが、これは自分の作る楽しさはあるんですが、競い合う楽しさはないわけです。人の能力を伸ばす一つの要素はやはり競い合うことだと思っております、そういった中で今回第1弾として、ミニ四駆というものを取り上げました。もちろん、その前の段階フェーズ1、2としては作る楽しさというものがございますので、それも従来の模型の作る中でやっていく、そしてここに書いてありますようにフェーズ4、5とデジタルツインということは書いてありますが、いわゆるリアルな物作り、自分で手を動かすものとコンピュータのシミュレーション、AI、私の専門の一つがAIですが、今フィジカルAIというのが注目されているように、コンピュータの中の世界だけではなくて実際のリアルとどういうふうに連携するかが非常に大きな価値になります。そういったものを小学校からの一連の流れフェーズ1から流れの中で学ぶという教育というのは世界的にもなく、今難波市長がおっしゃったように、STEAM教育そのものがこれから世界的に最も成長する市場と言われておりまして、その中で静岡の模型産業というのは十分伸びる要素があるというふうに考えております。別紙2の方でより詳細な説明がございますので別紙2の方に行ってくださいと、実際に非常にこの小型はですね、ミニ四駆の中に非常に小型の、私共がメーカーさんと開発する小型のセンサーを入れます。IMUと書いております

が基本的には慣性力を取る様々なセンサーがついておりまして、ここに一番のところに、9軸センサー、加速度、ジャイロ、地磁気とありますがこれによって走行中に横にどのくらい傾いているのか、横Gがどれくらいかかっているのか、加速度、全てのものが取れます。それによって、今ミニ四駆もタミヤで大会が行われていますが、今までは経験と勘で部品を変えていました。今回、モータ、ギアを変えるタイヤを買う、そういったものが全部数値化されます。こういったものをまだ数式を使えない段階であれば、グラフを見ながらある程度勉強で学んできた実際の数値を使って考えることにより、どのようなことが早くなるかわかります。実際今回のセンサーを使いますと車のデザイン、実際にウイングの角度、こういったものがジャンプの姿勢にどういう影響を与えるかといった細かいこともわかるようになりますので、本当にいわゆる将来のものの作り、極端なこと言えば、今世界的に進められている自動運転、そういったものにも繋がる基礎的な素養というものが、この学習の中でできるようになるというふうに考えております。そういった意味で、今年度の後半からは実際にセンサーを搭載したミニ四駆をモデル校の方に供給を開始いたしまして、教育委員会様とも連携しながら来年度からは既に学校の中で使っていただいて、まず高校からそして順次連携しながら小中学校そして市静岡市街、海外へと展開していきたいというふうに考えております。私からは以上です。ありがとうございます。

◆中村教育長

静岡市教育長の中村です、よろしくお願いします。私の方からはこの授業を通して、どのような教育効果があるかっていうことについてお話をさせていただきたいと思います。どのような学びを提供していきたいか、そしてどのような力を身につけてほしいと考えているかということなんですが、まずこの模型STEAM教育に参加する生徒さんたちには、まず作る楽しさ、模型の組み立てそしてそれを走らせてみて計測をする。計測した結果データ分析をする、そしてシミュレーション、それを見た上で改善、そしてまた発表、この一連のプロセスを体験しながら実際の走行データをデジタル空間上で再現すると。先ほどデジタルツインという話もありましたが、分析するデジタルツインを活用した学習を提供していきたいというふうに考えています。自らの手で物を作るっていう楽しさ、これを学べる模型とデジタル技術、これを組み合わせた実践的なSTEAM教育。これを通じて生徒さんの探究心、これをより深めることができるのではないかと考えています。また参加する生徒は物作りや先端技術への関心も高めてもらっていただいて、物の構造や仕組みを理解しながらデータを活用して、課題解決する力、そういったところに取り組む力を身につけ

てほしいというふうに考えています。

今回のモデル校、先ほど市長からお話がありましたが県立の清水東高校と静岡市立高校の2校を選定しました。これは静岡県教育委員会と協議の上、先進的な理数系の教育を実践していること、そして市内の公立高校の魅力化、特色化推進の観点から、市内公立高校のうち理数科を有する清水東高校と市立高校の2校を選定いたしました。モデル校の皆さんからは非常に好意的に受け止めていただき、実際に興味を持って進めていきたいというお声をいただいています。特に清水東高校の方からは成功探検メソッドというものがあって、それを基盤とした体系的な探求教育を積極的に推進していこうという背景があるようです。ですから理数科はもちろんなんですが、普通科を含めた学年全体での実施等、多角的に検討をしていただいています。

そして市立高校についてはご存知のようにSSHの取り組みであったりとか、科学探求科というところがありますので、そこでは理数系の学びが非常に充実しております。ただ今年度につきましてはカリキュラムが固まっていますので、そこについては課外活動であったりとか、クラブ活動部活動の方で進めていきたいというふうなお声をいただいています。

教育については以上になります。

◆市長

では今後の取り組みの進め方について、この資料をもとに、この資料の3になりますけれども、プロジェクトの進め方です。これは、市だとか教育委員会であるとかあるいは模型メーカーだけではなくて社会全体の力でやっていきたいと思っています。まず2026年度今年ですけれども、まずこの産学官連携のコンソーシアムを設立してその試作品を開発すると。これにセンサーをつけないといけませんので、センサーをつけて、そして全体設計をするというところですね。それから学習内容の検討をし、モデル校での試行ということになります。モデル校の試行は先ほど教育長の説明の通りです。

2027年度から2028年度については、試行結果を踏まえて教材、学習内容の高度化、これもモデル校でやっていくことになりますけれども、有志による試行ではなくて本格的な学校としての試行の段階にあり、それによってSTEAM教育のプログラムが確立できると思っています。単なる物を供給するんじゃなくて教材ですので、教育のシステムにしないといけませんのでそれをしっかり作っていくことになります。2029年度から2030年度ですけれども、これモデル校以外の市内外の学校への横展開をし、そしてこの開発したプログラムでは教材の海外展開を進めていきたいと思っています。それによって教育プログラムの高度化と、横展開によってSTEAM教育のエコシステムが確立できると考えておりま

す。実施体制はこの産学官連携コンソーシアムですけれども、これから今年の間はどういった方々に入っていただくかということを決めて順次依頼していきたいと思っております。もちろんあのタミヤさんだとか青島さんだとかハセガワさんだとか模型メーカーは当然入るわけですが、それ以外の方々にもいろいろ参加していただきたいと思います。技術的なところは昨日慶應義塾大学と協定を締結いたしましたので、共同研究をしながら先ほどのAIを活用したりシミュレーションをしたりといったところについてのいろんな面でのご指導を受けたいと思っております。説明は以上になります。ありがとうございました。

◆司会

それでは1件目のSTEAM教育プロジェクトにつきまして皆様からのご質問をお受けいたします。質問の際は、社名お名前をおっしゃってからお願いいたします。また併せて、誰にお答えいただきたいのかも含めてお願いいたします。いかがでしょうか。静岡朝日テレビさん。

◆静岡朝日テレビ

静岡朝日テレビの林ですよろしくお願いします。おそらく難波さんにお答えいただくのがいいかなと思うんですけど、資料の期待される効果の中で、人材の育成ですとか静岡が誇る模型産業のさらなる市場規模拡大を後押しとあります。静岡市の経済成長に繋がたいということですが、難波さんこれまでも企業誘致に積極的に取り組んでいる印象がありますし、あと静岡市は企業が来る土地が少ないということもあると思います。今後例えば、市立高とか清水東でそういうSTEAM教育を受けた学生さんに例えばですけど、今後静岡市残ってもらって学んだことを活かしてもの作りに励んでほしいとか、何かこの将来性みたいなビジョンがあれば教えてください。

◆市長

もちろんですね、静岡市残っていただきたいというのはありますけれども、学生については世界に羽ばたいて行って、またいずれ帰ってきていただければいいので。あまり地元にといいはないですが、やはり大事なことはこの地元の世界に誇る、地元の地場産業と言ってもいいと思う地域産業と言っていいと思いますけど、その模型あるいはプラモデル産業で学んで自分が力をつけてそして外の世界に出ていくっていうのは、それは必ず自分の心の中に残っていますから、その地域への想いっていうところですね、それが一番大事じゃないかなと思います。結果としてその方々が地元に戻ってきてくれる、残ってくれるの

は非常にありがたいですけども、こうやって新たにこの地場産業としての力がつきますのでまずは模型産業自身の新しい展開ということが一つあります。それから今言った方々をはじめ、静岡は面白いプロジェクトやっているよねってことでいろんな人材が集まってきて、これに派生していろんなことがまた起きると思いますから、それで新しい産業、もの作りだけでなくこういうサービス産業のようなところも活発になっている。だからデジタルだとかエンターテインメントのものも活発になってくるので、そういった総合的な効果があるんじゃないかなと思っています。

◆静岡朝日テレビ

個人的なことで申し訳ないんですけど、私も小さい頃ミニ四駆とか、あとあの某ロボットアニメのプラモデルを作るのがすごく大好きで、今回ミニ四駆を日本の教材にするってことですけど、今後、ロボットアニメのあのプラモデルがあると思うんですけどそういったものも活かしていくとかそういったことありますか？それもすごく魅力的な一つの作業だと思いますけど。

◆市長

これは一つはですね、昨日慶応義塾大学ともいろいろ話をしてきたんですけど、この部分だけじゃなくてさっき神成先生からお話ありましたが、小さい頃からより小さいもので組み立てていく。例えば非常に簡単なプラモデルもありますよね。何にもこんな難しいではなくて、カチカチって。それでもすごく頭を使ったりそれから感性が豊かになったりしますから、そういうところからいろいろ始まっていく。このミニ四駆の世界だけのこのSTEAM教育じゃなくて、そういった4歳から5歳とかそういうところは全部繋がったようないわゆるエコシステムですよ、うまくいく仕組みを多分作ることになると思うので、そこはちょっと慶応の先生からお話いただいた方がいいと思います。

◆神成教授

ありがとうございました。実際ミニ四駆はおそらくちゃんとやろうと思うと、それなりに数学の知識もいるので、裾野は広くやっぱり物作りの楽しさかなと思っています。私ども慶応大学は今回KGR Iの立場で入っていますが、私は環境情報学部ですがそれ以外の別の学部と連携するリサーチセンターが今回入っていて、複数学部のこの分野に興味ある教員が一緒になってやるので、私以外にももう少し年齢の差のSTEAMのですね、やっている教員も入りますので彼らとコラボレーションしながら様々なコンテンツを出していきたいというふうに考えております。

◆静岡朝日テレビ

その複数の学部っていうのはいわゆるその工学部みたいな？

◆神成教授

今入っているのは慶應メディアデザインという、KMDというところが入っています。その後、理工学部は今声かけたりしているので。

◆市長

昨日たまたまお話をさせていただくと、もう既にその先生はSTEAM教育の教材をお作りなってそれを普及されているので、そういう経験を持った方がこれを使って新たな教材作り、世界展開をするっていう取り組みをしていただけるのではないかなと昨日は期待できました。

◆静岡朝日テレビ

はい、以上です。ありがとうございます。

◆司会

その他ご質問を、はい、それでは静岡第一テレビさん。

◆静岡第一テレビ

静岡第一テレビ山崎です。教育長がよろしいかと思うんですけども伺います。これ有志生徒による学習や部活動という形で書かれているんですけども、ご確認ですけどこれ授業みたいな形でやられるっていう形ではないのでしょうか。そのあたりのちょっと具体的にこういったところの時間帯ですとかコマですとか、そういったところでやられるのかっていう具体的なところをお伺いできればと思います。

◆中村教育長

はい、授業としてどの科目で扱うかであるとか、どのような学習内容としていくかについては今後産学官のコンソーシアムの中で検討していく形になりますが、先ほど市長の方からも話がありましたように、やはりきちんとした教材カリキュラムとして開発していきたいというふうに考えています。ですので、将来的には教育課程の中に組み入れていきたいというふうに考えております。

◆静岡第一テレビ

今年度スタートするときは、いわゆる全校生徒が実施するっていうよりか、本来に一部の生徒さんが実施するというようなイメージなんではないでしょうか。

◆中村教育長

はい。今年度につきましては、そうですね。今年度の教育課程は2校ともにほぼ決まっておりますので、まずは課外的な活動とか部活動とかクラブとか、そういったところでこういったことに興味があるお子さん、有志の生徒さんに対して試行的にやっていきたいというふうに考えております。ただ、来年度以降については、今申し上げたように強化としてカリキュラムの開発をしていきたいと思っています。

◆静岡第一テレビ

今年度の時期っていうのは具体的に何月から始めるとかっていう、その辺りっていうのはいかがでしょうか。

◆神成教授

新しいものなので今開発してしまして、実際にそれを年内中、今年の11月中になるとは思いますけど、使いながら実際にバージョンアップして来年度に臨むという形になるとは思います。

非常にミニ四駆小さいので、この中に小さいセンサーを積んでしかもワイヤレスでデータを飛ばしますので、基本的にリアルタイムでデータ取りをします。なので、そういう超小型センサーを作っているの、それはタミヤさんとも議論をさせていただいておりますけど。そういったものは一応今開発中ですけど11月ぐらいには多分提供できる予定でして、それで今何ができるかということ、高校の現場と話をしたということです。

◆静岡第一テレビ

あとは、すごい僕らがイメージするのは学校にいわゆるコースみたいなのが組み立ててそこで走らせるみたいなイメージでいいのでしょうか。

◆市長

それはコースがないとできませんので、コースを走らせて計測をして、それを分析して、さっきの説明の通りですよね。これ実はあの、富士スピードウェイでこういう実車が走っていますけども、あれも同じことを結局はやっているんですね。いろんなセンサーがついていて、どこで何をやったかどうかとかそう

いうことをやっているのです。あれは大変なお金をかけて大チームでやっていますけど、これの魅力は個人でできることですよね。個人でこのミニ四駆の国際レースが将来、このセンサーをつけた国際レースみたいのがあるとそれに出られるというような所まで発展していくことを期待しています。

◆司会

その他いかがでしょうか。はい、静岡新聞さん。

◆静岡新聞

静岡新聞の山本です。中村教育長にお伺いするんですけれども、スケジュールを見る限りまずは5年というところなんですけれども、その中で今計画されています市立高校の再編が重なってくるかと思います。ここ中高一貫ですとか理数教育というところで、今回のこの教材との親和性が非常に高いと思うんですけれども、ここへの活用展開などはどのような構想を今練っておられますでしょうか。

◆中村教育長

はい、ありがとうございます。そうですね、市立高校2校の再編につきましては今現在、教育委員会の方で進めておりますけれども、今回の模型のSTEAM教育とその再編っていうのは別のものだというふうに考えていただきたいんですが、ただ今回のこの教育については将来的にやっぱ市内の高校から、そして中学校っていうところで広く広めていきたいというふうに考えていますので、近い将来市立の再編が進んだときも、新しい学校の中でもこの学びは継承していきたいというふうに考えています。

◆静岡新聞

その上で新しい新設校がですね、この教育を先頭といいますかどんどん試行の中でのブラッシュアップの中、先頭で走っていくようなイメージになるのでしょうか。

◆中村教育長

新しい学校がそうなるかっていうところに関しては今後検討ということになりますけれども、まずはモデル校ということで先ほど申し上げた清水東さんと市立高校でやっていきたいというふうに思っています。将来的には県内の公立高校の方でこのSTEAM教育が広がっていけるように、開発していきたいと思っています。

◆司会

はい、その他いかがでしょうか。はい、日刊工業さん。

◆日刊工業

日刊工業新聞の名取です。神成先生にお願いしたいんですが、先ほどフィジカルA Iの話も出ましたが、このミニ四駆の走行の状況とそういったシミュレーションとかそういうのが既にA Iを使うと何らかのものが実験しないでも出てくるんじゃないのか、それを実験で追認するような内容になってしまわないかというところは、A Iとリアルとの関係ってところもちょっと教えていただければと思います。市長も、もしA Iのところに関する感想があれば続けてお願いできればお願いします

◆神成教授

ありがとうございます。私も本来専門の一つA Iなんですけど、今様々な形で発展をしていますけれども、一番これ面白いのはA Iをどのように活用するかというときに、やはりものを作るっていうリアルなものと対話になりますよね。もう一つ面白いのは今回やっぱりシミュレーションと現実が違うと思います。A Iでやらせても実際に走らせると違いますし、絶対合いません。そのギャップを見ながらどういうふうにA Iを使うかって考えるきっかけになると思うんですね。コンピュータの中だけで閉じているとA Iが全て正しいというふうに勘違いする人も多いんですが、今回非常に大きいのはリアルなものの作りが変わることによって、なぜ違うのか合わないのかということを考えるきっかけにもなるんですよ。例えば車のシミュレーションにしても実際に物作りにおいても今後A Iがどんどん使われるんですけど、それがそのまま現場に適用できるわけじゃなくて、実際にそこに現場の工夫が入ってくるわけです。そういった実際にリアルなものをやるというのが本当のシミュレーションとずれるということを考えながら実際に学べる。そのきっかけになるのが今回一番重要だと思っていて、それが従来のコンピュータの中での教育と一番違う強さで、一番今後重要だというふうに考えています。

◆市長

私はあまり言えることはないんですけど、A Iが万能みたいな感じになっていますけど、道具としていかに使うかが大事ですので。こういうものを通じてA Iの使い方っていうところですね、そしてA Iも万能じゃないってところで、自分がやっぱり何かやっていかないといい結果が出ないというのはわかるはずで、そういうのが非常に大事じゃないかなと思っています。心の面でも大

事、頭だけじゃなくて、そういうところの心も鍛えられるんじゃないかなと思います。

◆司会

その他いかがでしょうか。はい、それでは発表案件一つ目については以上とさせていただきます。中村教育長、神成先生については以上となります。ありがとうございました。それではすみません、今から通常の会見のレイアウトに変更いたしますので少々お時間ください。

はい皆様お待たせいたしました。それでは引き続き２点目、３点目の発表案件について難波市長お願いいたします。

◆市長

それでは、知・地域共創コンテスト U N I T E 2026 の提案募集ということですが、これ世界の知が集まり、地域社会の力と繋がるスタートアップ共創都市静岡といっておりますけども、静岡はスタートアップと社会が共創してまち作りをしていくという、そういう面でスタートアップ共創都市という言い方を、静岡市はそういうとこだということを世の中に宣言をしているところでもありますけども、今回のこの地域共創コンテストというのはその一環ということになります。これについては 2024 年から始めているわけですが、今年で 3 年目ということになりますけれども、改めまして募集をするということになります。このコンテストは単にスタートアップのビジネスアイデアを評価するというものではなくて、スタートアップと行政、地域団体等が共働して約 1 年間にわたる実証実験を行って、社会課題を解決するための新しい社会システムの実装の共創というものを目指すものです。ちょっとわかりにくいんですけど、イメージとしては後で出てきますけど、募集をして、こういう社会課題があるというのを募集してそれに対してスタートアップが、いやその社会課題は我々こういうもので、こういう方法で解決をしてみせませうという提案をいただきます。そのときに普通はそのスタートアップのアイデア、あるいは技術の評価して審査するだけなんですけど、そうではなくてそこに市の職員が加わって共創チームを作ります。あるいは地域社会の人が加わって一緒に、例えば自治会の問題解決などと自治会の役員の方が加わってチームを作ってますね、実際にそのスタートアップが提案をした、その技術だとかアイデアが社会で実装できるか、実際に効果が出せるかどうかというところまで検証をするということのやり方をするプロジェクトにコンテストになっています。

そういった面でおそらく日本では唯一ではないかなと思いますけども、そういうコンテストをやってまいりました。昨年度も実施しました。昨年は U N I T

E2025 ということでやりましたが、全国から 207 件の提案が寄せられました。その中で例えばですけども、植物の中の菌を活用した、植物内生菌ですけど、菌を活用したエリートツリーによる再造林モデルの構築であるとかですね、これはかなりディープテックといいますかね、深い技術を持ったプロジェクトになります。それからもう一つは下水道汚泥由来の液肥の製造利活用スキームの構築などの 7 件のプロジェクトを選定しました。これらのプロジェクトは市の所管部局と地域団体等がともに共創チームを結成して、今年の 11 月までに社会実装に向けた実証実験に取り組んでいます。

例えば植物内の植物内生菌を活用したエリートツリーの再造林モデルというのは、木は菌類と共生をして育っていますので、この菌類をいかに活用して植林をうまくやっていくかとかそういったことを実証するんですけども、そのためには技術を持っても現場に入っていけないと実証ができないんですね。そうすると市の森林部局がチームに入って、そして今度は実際にその造林、森林の事業をやっている方々と一緒にこれをやってみると、そういったことで効果を試してみるというようなやり方をするものになります。今年は 3 回目になりますけども、市が 18 の社会課題を提示いたします。それからスタートアップからも、提示している以外に自分たちはこんな社会課題が静岡市に合うとみていて、それを我々はこうすることで解決をしてみせませうというような形で提案をいただきます。それを評価するということになります。

募集が 7 月 8 日から 8 月 7 日までということです。もう毎年これやっていますので、静岡市はそろそろこれをやるなというのは全国で結構の方に知っていただいていますので、今年も多く提案が集まるのではないかなと思います。具体的な課題等はそこに記載をしてありますが、例えば誰でも避難所運営ができる仕組みの構築であるとか、防災系ですね、防災情報を住民一人ひとりの行動に繋げ誰もが迷わず避難できる仕組みの構築。あるいは子供だとか教育で言うと、子供の特性に応じた支援先を保護者が容易に選択でき必要な支援に繋がる体制の構築であるとか。こういったものについてですね、現状はこういうことになっていて、取り組みの内容としてはこんなことが考えられますよねっていうところを提示して、これに対して応募をしていただくということになります。これから募集をするということです、今日の発表はそこまでとさせていただきます。

次に、しずおかホットリンク生きづらさを抱える方のための居場所の解説ということです。これについて私から概要を説明した後、担当部局から具体的な中身について説明をいたします。まず要旨ですけども、静岡市ではメンタルの不調や社会的孤立などにより生きづらさを抱えている方がたくさんいらっしゃいますが、これが既存の福祉制度だけでは支援に繋がりにくい方がいらっしゃっ

て、その方々への対応が課題になっています。そこで気軽に安心して過ごせる居場所としてしずおかホットリンクを開設し、心身の回復を支えるとともに、必要に応じて専門的な支援へ繋がります。オンラインと対面の両方の場を設けます。これによって外出や相談に不安を感じる方も利用しやすい、孤立の予防や早期支援に繋がります。

この取り組みの背景ですけれども、生きづらさということですが、これは医学的な診断や障害の有無に関わらずいろんな面の社会的要因や複合的課題によって、日常生活や社会生活に困難を感じている状態を指します。なかなか生きづらさというと少し曖昧な定義になっていますので、例えば障害の有無ということではいいますと、どこどこに障害があるということになります。生きづらさという面で言うと曖昧なわけですが、その点でなかなか正確な実数を把握するのは難しいわけですが、ただ国も様々な研究をしていますので静岡市の人口に当てはめると、相当な数の方がいらっしゃると思います。例えばメンタル不調であるとか、経済的困窮、ひきこもり、介護や子育ての不安ですね。こういったもので生きづらさを抱える方が数多く存在すると。皆様もなんとなく生きづらさを感じられている方が多いんじゃないかなと思いますけれども、そういう方は非常に社会に多くいらっしゃいます。そういう方々は一つの問題があって、一つのことが次の問題に繋がりとということではなかなか複合的な課題を抱えることが多いという状況にあります。それからもう一つ、その対人不安や支援を受けることへの抵抗感があるなかなか外から発見できないといえますかね、わからないという状態。つまり本人は悩んでいるんですけど、本人もどうしたらいいかわからないし、それから周りから見てもその方々にどうやってアクセスをしていったら、あるいはどうやって支援をしたらいいのかわからないということがあります。それがその適切な支援に繋がらないということになっています。そこで、課題が深刻化する前、深刻化するとわかりますので、これは今非常に問題課題があるというのはわかりますが、それより前の段階で本人と何らかの形で繋がって、見守りや専門支援に繋がる仕組みとして生きづらさを抱える方ための居場所を開設いたします。事業概要としてはその後に書いていますから、ここからは担当局から説明をしてもらいます。お願いします。

◆安心感がある温かい社会推進課長

安心感がある温かい社会推進課長の田中と申します、よろしくお願いします。事業概要から続けて説明させていただきます。まずこの事業を企画する上で、利用者の方にとってどんな場所が好ましいかということ、望ましいかということ、を考えコンセプトを三つ掲げました。

一つ目は、心理的に安全性が担保された安全基地として存在すること。それから2番目として、交流を通じた心身のエネルギーの回復の場とすること。それから3点目として、早期発見早期支援の機会に繋がるセーフティーネットとして機能すること。こういった三つのコンセプトの中でこの居場所を作ろうというふうに考えたところです。そういったコンセプトの中で、名称もしずおかホットリンクと名付けたところで、このサブタイトル、ネットでもリアルでも緩やかに繋がる、この二つ名称とサブタイトル、この名前をつけた意味合いは、米印に書いてある通りですが、まず静岡は地域との繋がり。それからホッとは安心感を。それからリンクは人と支援を繋がるっていうことを指します。こういった安心できる場所と必要な支援を緩やかに繋ぐ拠点として機能させたいと考えています。対象となる方々は市内に在住している方、もしくは市内に通学通勤している方々の中で生きづらさを感じている方々が対象となります。居場所の種類は二つあります。

次のページになります。

内容としては二つあります。まず一つはオンラインの場合。こちらは今年の7月17日に開設予定です。もう一つは対面の場合です。こちらは8月にスタート予定でございます。まずオンラインの場合ですが、利用者はアバターを選んでメタバース空間の中で自由に過ごすことができます。このメタバースの中で、他の利用者やスタッフと話したり交流したり、スタッフの方ともこのチャットで交流をすることができますし、場で開催されるリクリエーションに参加することもできます。また交流せずに1人で静かに進むことを過ごすこともできます。開設日時は、月金土日の4日間を予定しています。月金につきましては、15時から21時まで。土日につきましては、13時から18時までを予定しています。アバターの中には支援スタッフが2人常駐しておりまして、利用者の方々と交流をしたいと考えております。

続きまして対面の場合ですけれども、こちらもオンラインと同様、利用者同士やスタッフとの交流ができます。またリクリエーションなどにも参加できますし、1人で過ごす空間も作りたいと考えております。またこの対面の場合というのは、オンラインでの交流の中で発見された問題点、支援すべき内容があったときに、実際の支援に繋ぐための中継地としても使いたいと考えております。開設日は、各区月1回ずつです。葵区につきましては、第3木曜日にアイセル21で。駿河区につきましては、第2木曜日にみなくるで。清水区につきましては第4木曜日に清水テルサで開設予定でございます。どちらの場も利用にあたっては無料です。オンラインによる利用登録が必要にはなりませんけれども、利用登録にあたってはなるべく参加していただけるよう匿名性も維持しようと考えておりまして、登録にあたってはニックネームとメールアドレスを基本に登

録していただくように考えています。

続いてこの場にいるスタッフですけれども、福祉職や看護職の資格を持っている方々、またこういった資格を取ろうと勉強している学生さん、そういった方々が繋がっておりスタッフとして従事いたします。スタッフの方々は、利用されている方々の様子を見ながらコミュニケーションを取り信頼関係を構築した上で、いろいろな悩みや支援すべき内容を把握した上で、実際の支援に繋げようということを緩やかにやっていく、緊急性のある場合は急ぎますけれども利用者の状況を見ながら対応していくことを考えています。

次のページですけれども、メタバース空間のイメージ図になります。アバターは全部で 38 種類あります。また誰かと話しても話さなくても自由に過ごすことができます。専門のスタッフが閉ざされた空間の中でプライバシーを守って相談に応じることもできます。最後に、このしずおかホットリンクの特徴なんですけれども、この事業につきましては利用者の方々にとって望ましい居場所のあり方を検証しながら、本格的な実施に繋げるためにメンタルヘルス支援やウェルビーイングに関する研究実績を有する静岡福祉大学様との共同研究として実施し、その専門的知見を事業運営に活かしていきたいと考えております。

今年度実証的な運用を通じまして、利用しやすい開設時間や支援に繋がる仕組みを検証しまして、より効果的な運営方法の確立を目指します。今後はこの共同研究を通じまして、そういった効果を検証するとともに、家庭の支援に繋がるまでの過程などを把握したうえで開設頻度や運営体制、関係機関との連携方法を確立して、本格的な継続的な実施に繋げていきたいと考えております。説明は以上です。ありがとうございました。

◆司会

それでは発表案件 2 件については以上となります。ここから発表案件についてご質問をお受けいたしますので、皆様いかがでしょうか。はい、中日新聞さん。

◆中日新聞

中日新聞の飯盛です、よろしくお願いします。今最後に発表があった、生きづらさを抱えるための居場所についてなんですけれども、今年度この 4 月から静岡市が運営している、主に精神障害のある方の居場所となっている三つの地域活動支援センターを廃止しています。福祉事業者から予算を切られたんじゃないかみたいな声も上がっていますけれども、その代替という関わりになるような仕組みに当たるんでしょうか、今回のこれは。

◆市長

元々これについては、精神障害だけに限るのではなくて生きづらさをということで、もっともっと社会にいろんなニーズがあるということで変えていかないといけないという話がありました。それで今お話ありましたように、施設を閉鎖したので、何か予算を切ってサービスを低下させたんではないかなというご懸念がありましたけど、そこについては関係団体の方々と丁寧にお話をさせていただいて、こういうものもご紹介しながらそれだったらこちらの方がいいんじゃないかということでご理解はいただいていると、私はそういうふうに聞いております。私が直接お話をしてないんですけども、そういうことでご理解をいただいていると聞いていますけれども、担当部局から何かそこでコメントがあれば。

◆安心感がある温かい社会推進課長

はい、お答えいたします。確かに様々なご意見があったことは事実です。福祉関係者の中でも意見がいろいろある中で、そういったご意見もありましたけれども、先ほど市長がおっしゃったように関係者の方々といろいろな意見交換をする中で、やはり精神障害者に加えてその他にも支援しなければいけない方々がいる現状の中で、どういうやり方が望ましいかということをご説明する中でこの事業展開につきましてはご理解をいただいたと理解しております。

◆市長

今日はいろんなご質問いただいた最後に、少し事業の見直しについてですね、どういう考えてやっているかについて短くご説明をいたしますので、またその時でも参考にさせていただければと思います。

◆中日新聞

最後1問だけにしますけども、以前は昨年度までは対面の方が週1日ではなかったような気がして。それがちょっと週5なのはあれなんですけど、今回は、月1になるけどもメタバースを使うことで、ということでよろしいんでしょうか。

◆市長

そうですね、これは私の思っているところですけど、このメタバースのところがどのくらい利用者がいて、それに対してどう評価されるかが大きなポイントだと思います。私の考えというのは、やっぱりなかなか外に出づらい、対面でいろんな相談はしにくいという状態にある方は結構多いんじゃないかなと思うん

ですね。ですから対面ですと、やっぱり対面の方との関係を気にされるので、やっぱりここはアバターとの形でやるということで本当に気楽にといいますかね、気軽にといいますか、あまり抵抗なく参加をしていただけるんじゃないかなと思いますのでそこが多いのかなと。だからそういう面で言うと対面のところは減らしてもいいんじゃないかなと思います。ただこれ試行ですので、オンラインのところとアバターのところとそれから対面のところのバランスをどうやってやったらいいいのかというのはこれから試行をしてみて、試しにやってみてその需要がわかってくる。あるいはそれに対する評価がある程度出てきますので、こう変えた方がいいんじゃないかなっていうようなことがわかってくると思います。それについては、単にこんなふうに思いますということではなくて、静岡福祉大学にご協力いただきますので、そういったところで今やっているその取り組みの効果を評価して、学術的にも研究として評価していただいて、こう変えていった方がより効果が上がるんじゃないかとか、そういったことが提案できると、改善をしていけるとと思いますので。まずは試行と、試しにこれでやってみるということが大事と思っています。

◆司会

その他発表案件について質問いかがでしょうか。よろしければ発表案件についての質疑については以上といたします。続いて幹事社質問の方に移ります。本日の幹事社、静岡朝日テレビさんお願いいたします。

◆静岡朝日テレビ

静岡朝日テレビの林ですよろしくお願いします。

おそらく多くの者から質問があると思うので私から３点に絞って伺いたいと思います。昨日鈴木知事が県議会で、リニア中央新幹線工事の静岡工区の着工を容認すると表明しました。まずは受け止めをお願いいたします。

◆市長

はい。これは国の有識者会議をはじめ県や静岡市などとＪＲ東海との対話が丁寧に行われた結果だと思っています。その結果として、知事が自然環境保全協定を締結できるような、まず締結の判断ができるような状態に至ったということだと思います。これまで科学的根拠に基づく丁寧な対応を行ってきた全ての関係者の尽力の結果だと認識をしています。この対話というのは今通常に対話と使っていますけども、私が県の副知事にいるときにあえてこれは対話という双方向のコミュニケーションという言い方もありますけども、協議だとかそういうことではなくて対等な立場で話し合いをして、リスクはここにこういうト

ンネルを掘ると、こういう現象が発生をしてそれによってどういうことが起きて、そこはシミュレーションではそうなっているけども複雑性が大きいので、そこにはいろんなリスクがあります。不確実性とかリスクがありますというようになところを共有してですね、それが対話ですよ。それでまずはお互いに何が起こるんだろうかということを経験して、じゃあどうしようかっていうことをお互いに公開でやれやれとかいうのではなくて、こうするって言ったときに、いやそれだったらここに問題があるのでこうやった方がいいんじゃないですかという対話をするっていうのが大事だということで、対話という言葉を使い始めましたけど。そういった面で対話がずいぶん丁寧に行われたと認識をしています。ただこれから、これからだと思います。工事着手後において、ＪＲ東海の実環境保全措置が適正に行われるということが極めて大事で、それをいかに我々が確認をしていくかということが、社会がしっかりと確認をしていくことが大事だと思います。これ社会というのはいろんな広い意味での社会ですけども、静岡市という点でも静岡市は独自に監視体制を構築して、そして国も県もそういう監視したりされると思いますので国県とも連携をして、まずはＪＲ東海によるその後の工事による影響の回避、低減ですね。回避がまず基本、さらに低減が基本でどうしても回避低減できない部分が残るので、そこは代償措置でやりましょうと。それについてはしっかりと計測をしながら、その計測をした結果を評価して、それでやり方を変えていくという順応的管理ですね。初めから決めたやり方のままやるんじゃないで、現場はその通りにならないので、その状況を見ながら柔軟に順応的に現場に順応していくってことですよね。それが大事ですので、それがちゃんと行われているかどうかというのを、静岡市としては常に監視をしていきます。これについてはＪＲ東海がもう既に計測はこうやりますと、このぐらいの頻度でどの場所でどの程度やりますそれは公表しますということを明らかにしていますので、そのデータをしっかりと見て、それで監視をしていくということが大事だと思っています。

もう一つ知事の発言の中でも、法律に基づく手続き、法令に基づく手続きが整うということが自然環境保全協定を締結する前提となりますので、静岡市は盛土規制法と森林法と土壌汚染対策法の三つの法令手続きの権限を持っていますけどもその権限に基づいて、これは各種法令については基準に基づいて判断することになっていますので、法令に適合しているかどうかを審査した上で許可等を行う予定です。あの、ちょっと余分になりますけど、この法令については許可できるという法令と許可しなければならないという方で二つあります。例えば、河川法の占用許可のようなものは、特別に許可するんであって常に許可しなきゃいけないわけではないわけですね。社会的意義がある場合は許可できるということですので、こういう申請があっても許可しないということがあり

得ます。ただこちらの盛土規制法と森林法と土壤汚染対策法については、外形的な基準ですね。各種法令の基準に適合した場合は許可しなければならないというような法律体系になっていますので、そうするとその基準に適合していれば許可等をしていくということになります。

◆静岡朝日テレビ

鈴木知事は就任後に、リニア問題はスピード感をもって取り組むと話しました。結果的に就任後２年での着工容認となりましたけれども、このスピード感についてはどのように評価されますか。

◆市長

２年というのは早いのか遅いのか、っていうのは、これもいろんな評価があると思いますが、ただ中身は非常に検討の困難性というのは高い複雑な問題で、科学的根拠に基づいて評価をするためには相当の時間がかかるというものでしたから、それについてしっかり時間をかけてやられたんではないかなと思います。スピード感という言葉を使っていますけども、要は無駄な時間は使わないっていうのが大事だと思いますね。妙に急いだりするのではなくて、適切にやることをきっちりきっちり前に進めていくっていうのが私はスピード感なんだろうと思いますので。例えば何か検討してくれって言って１ヶ月ほったらかしになっているっていうようなことをしないで、ＪＲ東海から資料が出てくればそれをしっかりと見て、問題点を指摘して、次に行くっていうそれをずっとやってこられた結果ではないかなと思いますので、そういった状態だったと思います。その結果として以前と比較すると、検討のスピードは上がったと思います。以前はやはりいろんな発言もあったりして、知事のいろんな発言、前の知事ですけど、いろんな発言もあり、そこで科学的でないお話で時間をとってしまうというところでスピードが上がらないというところがあったと思いますので。あと一番大事な科学的根拠、そしてもう一つは住民理解ですよ。その二つを重視しながら適切なスピードで行えたんじゃないかなと。はたから見てもう思っています。そんな状況です。

◆静岡朝日テレビ

最後に、ちょっと話が戻って申し訳ないんですけど、静岡市としては河川法ですとか土壤汚染対策法とかいろいろ法令があると思うんですけど、準備状況として今いかがでしょうか。

◆市長

盛土規制法と森林法と土壌汚染対策法、これなんですけどこれは資料の提出がありました。もう受付をしていますので、今内容について審査中になります。これは受け付けてから審査をするというのでは初めて審査するのではなくて、事前に不備があればここは直してくださいとか、そういったことをずっとやってきた結果ですので、今回もし受け付けた時点で不備があれば受け付けた時点で指摘をします。例えば、今までこういう問題があるので直してきてくださいねっていう話をしてきたのに、直ってこなかったらその受け付けた時点で受付はしますけどね。受付はしないといけないんで受付はしますけど、受け付けた時点ですぐにここに問題がありますということを指摘しますので、そういう状況ですから今回は受け付けて特に問題点の指摘はしていないと聞いていますので、これから今まで確認をしたことを改めて再確認をしっかりして行って、それで基準に基づいて判断するということになると思います。従って、標準の処理期間が定められていますので、標準の処理期間の中では許可等ができるんじゃないかなと考えています。

◆静岡朝日テレビ

幹事社からの質問は以上です。ありがとうございました。

◆司会

それではただいまの管理者質問についてご質問をお受けいたします。はい、テレビ静岡さん。

◆テレビ静岡

テレビ静岡の高本です、よろしくお願いいたします。経済効果、リニア開通後の期待するところというところで伺いたいんですけども、静岡市への経済効果などを市長として期待するところを教えてください。

◆市長

私それ何回も聞かれているんですけど、申し訳ないんですけどあんまり期待してないんです。今話し合うのは10年後に開通ってところの経済効果だと思うんですね。だから今すぐ効果が出るわけではなくて、ごめんなさいね、経済効果っていうのは次の経済効果じゃなくてリニアが開通したときの経済効果ということでおっしゃっているんだらうと思ってお答えしますけど。そうすると社長さんもおっしゃっているように、10年ぐらいは少なくともかかりそうだということなので、10年後にそういうことが起きうるわけですね。例えばひか

りがもっと止まるようになるのか、のぞみも止まってくれるようになるのかわかりませんが、ただそれだけに期待していてもそれ 10 年後の話ですから。静岡市の問題は今のひかりが止まってくれているのに、乗降客数が少ないんですよ。つまり静岡市、特に観光ですけど、静岡市に観光で訪れる人が少ない状況にあるわけですね。だから今我々がやらなければいけないのは、今の新幹線の状態、これから 10 年は少なくとも続くわけですね。その状態でいかに経済効果を上げていくかということをやるのが大事で、それをやっていけば、たくさん乗降客数が下りるような駅には鉄道会社は当然そこに電車を止めたくなくなりますから、つまり J R 東海に何かやってくれやってくれって期待するより前に、静岡市として観光振興なりあるいは街がもっと人が集まってくれるような街にするという努力をするのが一番大事ですので。ですから経済効果を期待したいといったいうとちょっと問題ありますけど、その経済効果に、将来の経済効果に期待するより前にやる必要がありますよねって言うところですよ。それをしっかりやっていかないといけないと思っています。ただし、あの歓迎は歓迎ですよ。できたら 10 年後じゃなくてもっとひかりものぞみも止めてほしいぐらいですけど、やるんだったら今やってほしいですよ。

◆テレビ静岡

ちょっと想定外の答えで、はい、ちょっとわかりますけれども。それは市長がおっしゃったように J R 東海側もひかりを 1 本から 2 本という話見通しですけども。静岡市としては、この今後 10 年間やるべきことってというのは、乗降客数を増やすというところにまずは力を入れていきたいというところですよ。

◆市長

もっと電車を止めたくなるまちにするということですね。それが一番大事だと思いますけど。

◆テレビ静岡

ちょっとまた将来的な話で恐縮なんですけど、少なくとも 10 年かかると言われている中で、10 年先リニア開通後に描いてるこの静岡市のこの未来像将来像をどういったふうに発展していったほしいか、みたいなところを。

◆市長

開通後というよりも、とにかくワクワク、今ここに住んでいる人たちが安心感がある温かい社会推進課がやっているように、安心感がある社会を作っていく

というのが一番まず基本で、そしてもう一つは、あのワクワク感ですよ。ワクワクする街にしていくということで。そうすると、ここにいる人が今静岡市にいる人がワクワクする、それから外から来た人もワクワクするということですね。鈴木知事がよくウェルビーイングのお話をされていますけども、これは心も体も健康な状態っていうことだと思いますけど、その基本となるのはやっぱり居場所があったりする先ほどの安心感がある、ほっとするような場所、安心感がある温かい社会ってというのがあって、そこの中で日々活動しているとワクワク感があるとか生きがいがあるような街ですよ。そういう街にしていくのが一番大事だと思っていますので、そういうまち作りが大事ですね。それはリニアに期待するんじゃなくて自分たちでやっていくのが一番大事だと、自分たちというのは、社会全体の力でやっていくので誰かに頼ってやってくださいとか、ＪＲ東海、あまりこれ以上言わない方がいいのでやめておきます。そういうことです。

◆テレビ静岡

ありがとうございます。まずは乗降客数を増やすための地盤作りじゃないですけどそういったところに力を入れていきたいと。

◆市長

そうですね、その代わりにそのリニアが開通した後に、のぞみだとかひかりをよりたくさん止めてくれるということになれば、それがより活かされるようになるということですよ。

◆司会

その他、幹事社質問についていかがでしょうか。はい、中日新聞さん。

◆中日新聞

中日新聞の飯盛です、よろしくお願いします。リニアについて昨日知事からも着工後ここからが本番という言葉もありました。工区のうち、県内には土被り1400m、最難所の一つと言われている部分もあります。難波さんは土木工学の技術者でいらっしゃいますけども、以前インタビューのときも私なら掘らないとおっしゃっていました。その思いというのは今も変わっていないんでしょうか。

◆市長

今日そのタイミングであんまり言うのが適切な時期ではないと思いますので、

今日はコメントしないことにしたいと思います。今日はあくまで市長としての記者会見としてはそれについては申し上げることはなくて、いち、土木技術者として思うところがありますけれども、今日このタイミングであまりその話はない方がいいと思いますので、今日はコメントなしということにさせていただきます。

◆中日新聞

ありがとうございます。もう一問、昨日知事が説明の中で川勝前知事時代の話に触れていまして、難波さんが副知事をやってらっしゃったときも含めると、長年の議論について問題提起をしなければ、そのまま着工していた可能性があるかと一定の意義があったと述べられていました。難波さんご自身が、副知事時代に果たした役割をどう分析されているのかということと、川勝知事前知事への評価というのを分析されますか。

◆市長

まず川勝知事の評価ですけどやっぱりそれは川勝知事がおっしゃる通りだと思いますね。とにかく最初にＪＲ東海のこの取り組みは甘いと、認識が甘いというところですね。川勝知事は科学的根拠というところよりもやはりその地域社会にどういう影響があるのか、要は評価ですね、価値判断ですよ、川勝知事は価値判断をしっかりされたんだと思うんですね。知事のような政治家の役割ってというのは選挙で選ばれて、価値判断をいかにしっかりやるかということですよ。先ほど申しました森林法の手続きだとかそういうのは行政判断になりますので、そこにあまり政治的要素が入ることはなくて、基準に基づいて的確に判断をしていくということが求められるわけですね。ところがこのリニアの問題やっぱ価値判断で、鈴木知事もおっしゃっていますが、社会的理解が得られるかどうかというところが大事ですけども。ですから川勝知事の発言というのは、それは社会的な理解が得られないというか、社会の求めている価値観とＪＲ東海がこんなものでいいだろうと思っているところは違うでしょ、っていうことの指摘だったと思うんですね。

もうちょっと具体的に言うと、最初の段階はＪＲ東海は、例えばトンネルを掘って大井川の水が毎秒３トン減りますっていうときに、それほど大きなことだと捉えてなかったわけですね。その３トン減ることを前提に影響が出ますけどってというようなことで終わっていたわけですよ。ところが、その３トンはどう見るかっていうところは、これは科学的根拠の問題ではなくて３トンが本当にその通りかどうかというのは科学的問題ですけど、毎秒３トン水が減るということをどう社会として評価するか。そのとんでもない話だということか、そん

なくらいしょうがないですよっていうか、そのところは、あの科学ではないわけですね。そこに対してこの市民なり県民の皆さんが判断するので、それを政治家らの知事がどう価値判断をして、これぐらいの理解が得られないと、それはやるべきではないということだと思いますね。

もう一つは自然環境の問題ですよ。大井川の水が減るということと、南アルプスの自然環境にどう影響を与えるか。これも同じで、このぐらい影響が出るということの価値評価をしないといけないわけですよ。ですから、南アルプスの環境をどれだけ悪化するか、悪化の基準がないんですよ。環境影響評価基準がないのですから、これだけ悪化するっていったときそれを社会的に容認できるか容認できないかっていうところが非常に大事で、そこは最後は社会も判断しますけどその社会の評価なり判断を知事がどう評価することだと思えますけど。それについて、ちょっとすいません長くなりますけど、川勝知事は非常にその厳しく見ておられたというところですね。厳しくてというか、正に厳しく見ておられたと思いますけど。ＪＲ東海はそこへの認識が甘かったと。その自然環境、南アルプスへの自然環境への影響、それから大井川の間流域の水資源への影響への社会的な評価について認識が甘かったということだと思います。そういう形がはっきり指摘をされたということだと思いますので、それが非常に大事だったと思いますね。

もうちょっとだけ申しますと、最初の段階で私と川勝知事、当然知事と副知事ですので価値判断するのは知事ですけども、それはあの選挙で選ばれているわけですから、ただ私もそれなりに評価はしましたけど知事の見方はもっともっと私より、厳しかったですね。でもやっぱり知事からその話を言ってやっぱりそうだなあということで、どちらかというと私の考え方が甘いなのというのはその時実感しました。

あともうちょっとだけ申します。その後はやっぱり科学的根拠ですよ。だからその社会的影響の見方がＪＲ東海は甘いというところをしっかりと指摘されて、じゃあどういう影響が出るのかっていうところをやっぱりちゃんと評価を分析して、それは科学的根拠に基づいて分析しないといけないですね。それを十分ＪＲ東海はやってなかったわけですよ。ただ私の役割はそれをやることですよ。副知事８年間やって、実際にリニアの問題に関わったのは６年間ですけど、理事も含めて６年半ですけど、そう間にやったのはもう科学的根拠に基づいてどういう影響が出るのかをきっちりと分析をしていく。それでそこに不確実性なりリスクがあることを明確にして、その不確実性とリスクにどう対処していくかという仕組みを作っていくっていうことをずっとやりましたので、それが私の役目だったと思いますけど。そういう面で、どういう役割を果たしたのかというところで言うと、科学的根拠に基づいてしっかり評価をしていく環境

影響評価をやる方向で、一生懸命県の職員とともに頑張ったということだと思います。すいません長くなりました。

◆司会

その他幹事社質問関連よろしいでしょうか。はい、静岡朝日テレビさん。

◆静岡朝日テレビ

静岡朝日テレビの林です。リニア関連なんですけれども、このように難波さんは川勝知事のことを評価されました。少し前のことになって大変恐縮なんです。川勝知事が以前静岡市内で開かれた合唱コンクールで指揮をとられました。その際に報道機関に対して、リニア問題に関してお答えいただいたんですが、県とＪＲ東海との対話、まさに難波さんがおっしゃるその対話に関しは終わってないと私は思っているというふうに発言されました。元上司がこういうふうに、あの発言されています。現時点で川勝前知事は私人ではありますが、この前知事のこの発言に関してはどのようにお考えでしょうか、何か思うことがあれば。

◆市長

対話が終わっているかどうか、っていうそこは先ほどもちょっと申しました、環境影響評価ってのは基準がないんですよ。ですから、どの程度の環境評価をやらないといけないかっていうのは基準がないので。おそらくですけども私も環境影響評価はずっと関わってきましたので、日本全国の環境影響、かつての環境影響評価の内容を見て、今回のＪＲ東海のやった環境影響評価以上の環境影響評価をやったところはないと思います。つまり今まで日本で行われた公共事業の中において、一番詳細な環境影響評価が行われたのはこのリニアのこの静岡工区の問題だと思います。ただ基準がないので、それで十分かどうか、かつてよりも一番それで詳細な検討が行われたからだからいいというわけではないですね。別の見方をすると、南アルプスという非常に希少性の高い環境の中で行われる工事だからそれだけの環境影響評価というのは当たり前じゃないかと、まだ十分に終わっていないっていうのもそれは一つの意見だと思います。ですからこれは答えがないわけね。正解のある問題じゃないわけ。基準があって基準に適合すればいいというのはこれは正解がある問題ですけど、これは元々基準がないので、人の価値観に基づいてこのレベルでいいかどうかを判断するので、価値は本当に多様ですから川勝知事のように終わっていないという自分の価値観に基づいて、これはまだ終わっていないっていう評価をされる人もいれば、これで十分だという評価をされる人もいますので。ですか

らそこはあまりどっちが正しいとかっていう問題じゃないので、あまりコメントするのは、川勝知事はそういう評価をされているんですよっていうことしか言いようがないということですね。

◆静岡朝日テレビ

わかりました。すいませんあと2点だけすいません。静岡市含めてJR東海が住民説明会を開催しました。鈴木知事は住民の理解が概ね得られたという趣旨の発言をされていますが、難波さんも同じような思いでいらっしゃいますでしょうか。

◆市長

思いというか、あの鈴木知事がどういうことでやられたこれも先ほど申しましたように、鈴木知事の価値判断に基づいて行われるので、政治家としての価値判断でやられるということですので、知事と同じかどうかというのはわかりません。同じ基準に基づいてというか、それで評価しているかどうかわかりませんが、例えば何人に説明できたのかとか、何人来たのかとか評価されているのかどうかってそれもちっとよくわからないんですけども。それはそれで知事は評価されたんだと思います。私は市外のところはですね、あんまりコメントすべきではないと思いますので、静岡市市民がどう考えておられるかということですけども、当然これはさっき言いましたように環境影響評価についてはこれが正しいというものはない、この水準までやらなければいけないというものはないし、これらからいいと決まったものはないので、今の状態がどうかという私の場合、一応市長ですので政治家としての個人判断ということになると、これは十分な検討はされたとは私は理解しています。住民の理解についても100%の理解というのはありませんから、昨日も多くの方が反対をされていましたが、反対されているのは当然だと思います。それはその方々の価値観だとか考え方に基づいてこれでは不十分だと思っておられるので、それはそれで一つのお考えだと思います。ただ社会全体としてどうかということになると、一定の評価は得られたということだろうと思いますので、100%全員の理解を得られないとできないというものではこの環境影響評価ありませんので、そういった点で社会的な評価は一定の社会的評価を得られているという判断をしています。ただ私のところはそれでもって着工の判断をするところはないので、単なる感想になってしまいますけど。

◆静岡朝日テレビ

長くなってすみません、あと1問だけよろしいでしょうか。中日新聞さんの質

問にちょっと絡むんですが、工事その最短でも南アルプスの静岡工区が10年かかるっていう本当に一大プロジェクトで、あの難波さんはおよそ40年ですかね、国土交通省でも本当に専門的にやってらっしゃったと思いますがどうでしょう。10年という期間かなり大変な工事だなと思いますけれども、少しその工事に対するお考えがあれば教えていただけないかなと。

◆市長

いや、大変な難工事ですね、もう全部調査をしてやるっていうことはできないんですよ。ですから、やってみて、それで例えば断層破碎帯に行ったときの状況が思ったよりよければ想定より楽に掘れますし、想定よりも悪かったら、非常に苦労するわけですね。ですからこれはもう、言葉悪いですけどやってみないとわからない。工事の難易度はやってみないとわからないんですけど、環境影響がやってみないとわからないじゃ駄目なわけですよ。ですから、難工事でそういうところに当たったとき水が出たときに、水をあまりにも流出させすぎると大変な影響が出るので、だから水が出始めたらそこでしっかり監視をして、そこでどういう影響が出るかっていうのを見ていくことが大事ですよ。ですから先ほど最初に申しましたが、これ監視体制というのは極めて重要で、それはトンネル工事自身がどのぐらい難工事かはやってみないとわからない。でも、環境影響評価はやってみてもわからないような状況ではなくて、影響が元々想定した影響内に収まるようにきっちり管理をしていくっていうのが大事だと思いますけど。

◆司会

その他、幹事社質問関連よろしいでしょうか。それでは幹事社質問については以上といたします。最後になりますけれども、その他ご質問あればお受けいたしますがいかがでしょうか。はい、SBSさん。

◆SBS

SBSの植田です、よろしくお願いします。駿府城公園の紅葉山庭園茶室の改修事業についてお伺いしたいんですけれども。市長以前会見の中で来訪者が宿泊できるような機能も持てるようにしていきたいとおっしゃっていました。先日、市議会の委員会の中での必要性や妥当性について疑問視する声が上がってまして付帯決議が可決されたんですけれども、そのことについてどう受け止められたか教えてください。

◆市長

いやまだこれからそこのお話いただくので、これから対応していくということになると思いますけども。それでどういう議論がされたのかちょっと細かいとこまだ承知をしていないので、その上でこれから判断していくことになりますけども。報道の中で議員の方がおっしゃっていたことが事実かどうかというのが、それもちょうと確認できないところではあるんですけども、まず大事なことは宿泊施設を作るのではないんですね。宿泊体験ができるように改修するんですね。それは何かというと、あの紅葉山庭園という素晴らしい日本庭園があり、それで日本建築があるわけですね。その中で日本体験をしてほしい、本物の日本体験、本物というか最高のこの日本体験をしてほしい。その日本体験はなにか、それはお茶を飲むだとか、美味しい食事もあるし、あるいはいろいろなエンターテイメント的なものもあると思いますけど、一つは泊まるって事ですよ。畳の上に布団を敷いて寝るっていう、これも一つの文化体験なわけですよ。朝起きると、布団に寝ていると鳥の声が横で聞こえて、あるいは水の音もしているわけですよ。その静寂の中で水の音と鳥の音を聞いて、朝の木漏れ日を感じるみたいな。それを布団の上で、素晴らしい日本建築の布団の上でするってこれは日本体験としては最高レベルの体験ができるわけですね。だからそういうその日本の文化体験、最高の日本文化体験ができるような施設に改修するわけです。ですから、ベッドを置いてホテルにするわけじゃないわけですよ。布団を敷いて寝るわけです。そのために改修するわけですね。そうすると、消防法だとかいろんな規定でサインをつけないといけないわけですよ。何かあったときにサインをつけないといけないので。例えば避難経路はこっちですみたいな作るのがありますけど、それぐらいの改修なわけです。建物自体は、やはり日本文化体験をするためには、宿泊してもらうためにはお風呂がさすがにないといけないのでお風呂も作りましょう。ただお風呂を日本建築中に作るわけにいかないの、その背後に空いているところにお風呂を作る。それは、日本体験で布団の中で寝るのであればシャワー施設がちょっとあればいいっていうこともあるわけですね。日本体験なのでやっぱり昔風の風呂ですよ。五右衛門風呂とは言いませんけど、木で組んだ枠の中の桶のようなものに入るようなものがないということになれば、それはその建物を外に作るわけですよ。でもそれはあくまで日本体験の一つで作るわけで文化体験の、宿泊施設を作るわけではないわけですね。そこについてどういうご理解をされて、今のような決議がされているのかわかりませんが、市議会の皆様には目的はそういうことですよっていうことは何度も申し上げて、それを最高の日本体験をするというのを月に1回とか多くても2回ぐらいやるということですから。宿泊施設っていうのはほぼ毎日使えるのが宿泊施設で、そうではなくて宿泊が

できるような宿泊体験ができるような施設に改修するということですから、それについていろんなご意見があるようですから。それはこれから付帯決議の内容もしっかり見た上で、そしてどういうことをご懸念されるかというのをこれもしっかり話し合いをしてですね、これからこういうものならいいんでしょうかということで、設計をしていくということだと思います。

◆司会

その他の質問についていかがでしょうか。よろしいでしょうか。それではその他の質問についても以上といたします。

◆市長

一つだけ追加でご説明をしますけど、先ほどの障害者用の施設、精神系の方々の施設についての統廃合の問題があるわけですけど、これ補助事業にしていますけど事業の見直しっていうのをどういう観点からやっているかということですね。それをちょっとだけご説明しておきたいと思います。いずれこれからフェリーの話も出てきますと思いますので、あらかじめこういう観点で我々考えていますっていうことをお話しておきたいと思います。補助事業なりいろんな事業を見直ししていますけど、予算削減のためにやっているわけではありません。これは、限られた予算をより社会への効果の高い取り組みに配分するためにやっているわけですね。この補助事業は何のためにやっているかという、これはよく言われますけれども、市場原理だけに任せておくとか何らかの原因でサービスとか、ものの供給が質と量の点で過小となる場合に、そこに補助金を行うことで供給を社会が望ましい状態に戻すっていうことですね。これが補助事業の目的になります。

フェリーについて、何で、あれを公共でやっているのかというところですけども、これフェリーを運航すると静岡県全体の観光収入が増加します。それは所得の増加、経済効果、お店の売り上げだとか経済効果そして個人の所得の効果が発生をします。ところが、この経済効果のほとんどはフェリー会社の外で発生するわけですね。お客さんを静岡から伊豆に運びました、そこで宿泊をしてくれて観光で消費をしてくれてそれが非常に大きな経済効果になるんですけど、フェリー会社が取れる料金っていうのはその運賃のとこしか取れないわけですね。このフェリーの運航というのは、ここのそのいわゆる外部経済効果っていうのは極めて大きいわけですね。ところが、フェリー会社は外で発生した効果を自分のものにできないわけですね。例えばフェリーに乗ったお客さんがある旅館に泊まってくれたので、それはフェリーがあったからこの旅館泊まってくれたでしょうと、その分だけ自分のとこにお金をくださいって言っても

払わないですよ。ですから、結局内部化できないわけですね。そうすると何が起るかということ、何もしなければフェリー会社のサービスの供給量は過小になるか、ゼロになってしまう。社会的には、社会的にというか静岡県全体の経済効果を考えると、フェリーがあった方がより儲かる状態が起きるんですけども、フェリー会社の経営だけ言うともう運用できないってなるんですね。ですからこれ補助をしているということになります。補助事業はみんなこういうことになります。我々この補助より上の企画審査にあたってはこういうことを考えてやっています。

ここでもう1回言うそうですね、ちょっと戻してもらって、予算削減のためにやっているんじゃないくて、その毎年毎年いろんな新しい事業が社会的な要求が出てくるのでその中で組み替えていかないといけないですね。だから毎年毎年、よりその効果の高い補助、あの社会効果の高い事業があったらそっちに配分をしていくということをやって、今までやっていた事業は確かに効果があるんだけど、こっちはやめまస్తుというなるわけですね。それがまず大事ということで。もう一つ非常に大事なところなんですけど、ちょっと今日は、あの、もっとこの上げてもらって、少額補助を今どんどんやめています。これなぜかっていうところですけども、これも費用対効果、基本は費用対効果なんですね。費用対効果が高い事業を採択するということですけども、例えばですけどこれよくB/C（ビーバイシー）といいますね。補助によって達成する効果、例えば10万円の補助事業をやるときに、その社会効果が2倍、20万円の効果があれば費用対効果は2倍になるわけですね。だから10万円の補助をすることによって、20万円の社会効果があれば、その2倍のB/Cがあるのでこの事業は○になるわけですよ。ところが、この10万円の事業はそうはいかないんですね。ここに事務費がかかるんですね。ある事業の事務費を計算すると、この10万円の補助事業をやるために、事務費が40万円かかって、今の補助金が10万円かかっているんで、全部で50万円かかっているんですよ。20万円の効果は一緒ですから20万円の効果を出すために、50万円の費用を使っているんですね。だからこういう事業はやめましょうということなんです。ですから、少額の補助事業をどんどん今やめていっているのはこういうことで、極端に言うとも100万円ぐらいの事業をやるために人が1人張り付いているっていうのがあるんですね。そうすると人件費500万円その人で食うわけで、ですからそれを考えると非常にその費用対効果が低いわけですね。だから、こういうふうに事務事業としてこの間接費まで含めて事業を中止する。じゃあこれで削減をしたんでどうするかというと、より補助効果の高い次の事業が出てくるので、そっちに入れるということですね。

今日最初の説明であったように、ある部分の施設を廃止して次のサービスに変

えますけど、それは担当課は、あの、私はいろいろ予算の削減を言いますけど、担当課局はそのより良いことをやりたいわけですね。予算を切りたい課はあんまりいないんですよ。今ある予算の中でより良いことをやりたいってみんな思ってるわけですね。そうすると、より良いことをやろうと思ったら、今あるこれはこれよりももっと効果の高いやり方があるからこっちに変えますっていうことを常にやってます。ところが、今までやっていたのを止めるものですから、その部分はなんでそんなことするんだっていうことでそこにいろんなご意見をいただきますが、その担当課やっていることは、その中でより良いものを提案をして社会効果が高くなるようにやってるわけですね。それは今日のしずおかホットリンクは、今までやっていたやり方で施設に来ていただくよりも、ああやってアバター的にオンライン空間でやった方がやっぱりそこに、生きづらさを抱えている人がアクセスしやすいと、入り込みやすいっていう繋がりやすいっていうのがあるので、そういうやり方をした方がいいんじゃないかということで提案をしているわけです。私がやるようにって言ったわけでも何でもなくて、担当課がこうやった方がいいんですっていうのでそうですかっていうことなんですね。ほらいいよねってそれぜひやったらいいよねっていう話なわけですね。ですから、保健福祉センターも同じなんですけど、保健福祉センターを廃止するということでご批判ありましたが、あれも丁寧にお話をした結果、こっちの方がいいですよっていうことに多くの方々はそういう意見をいただいています。あれも同じで担当局が同じ予算の中で、保健福祉センターを市民のサービスがより悪くなるような方向に変えるわけがないわけですね。みんなより良いサービスをしたいと思っているわけです。安心感ある温かい社会推進課なんか典型的ですけど、そういう社会をどうやってやったらいいかを常に考えているわけですね。そうすると、今ある保健センターを廃止して集約して、そして他のサービスを一体的にやった方が市民のためになるかなと思ってやっているわけですね。ところがその廃止するところだけを見ると、必ずそれは今までそのサービスを受けていた人は、いやちょっと不便になるとなるわけですね。その声が大きくて、社会全体が良いっていうところがあんまりその評価されてこないっていうことになるわけですね。

だから我々、最後にもう一言だけすいません。ずいぶん長い時間かかりましたけど、言いますが、社会が良くなる方向に、要は幸せになる方向です、ウェルビーイングですけど、心と体がより健康になる方向にやるために何をしたらいいかっていうことを常に考えた上で、事業の見直しを常にやっていっているということですね。ですから予算を削減するためにやっているわけじゃなくて、その削減した予算をより良いサービスに使うために何をやったらいいかというのを考えてやっているということです。ちょうどあの中日新聞さんからの

お話をいただきましたのでその関係もあってですね、お話をさせていただきました。はい、ありがとうございました。

◆司会

以上をもって本日の市長定例記者会見を終了したいと思います。ありがとうございました。次回の市長定例記者会見は、7月23日木曜日の11時からとなりますのでよろしくお願いいたします。